一週一夜物語

小栗虫太郎

青空文庫

一、大人（サヒーブ）O'Grie（オーグリー）

僕は、「実話」というのが大の嫌いだから、ここには本当のことを書く。

というものの、どうもこれが難題なので、弱る。作らず、嘘でなく、じっさい僕が聴いた他人の告白なんて——よくよく天邪鬼（あまのじゃく）でないかぎり、いえた芸ではないと思う。

とにかく、これはいわゆる実話ではない。あくまで、僕が経験し、じっさいに聴いた話である。

で、冒頭に、僕の経歴の一部を明らかにする。これまで、経歴不明の神秘性がある——とかなんとか云われるのは心外であったが、この機に残らずぶちまけてサバサバとしてしまいたい。

それは、中学を出て一年遊び、翌大正八年五月から十一年二月まで、横浜山下町一五二番地、メーナード・エス・ジェソップ商会というのに勤めていた。この店は、ブロンズ扉（ドア）や、ボード・ジョインターや特殊錠、欄間（らんま）調整器などの建築金具を輸入し、輸出のほうは、印度、蘭印方面へ日本雑貨を向けていた。もちろん僕は雑貨掛りのほうであった。

ところが、大正十年十一月九日、年に一度は、顧客（とくい）廻りに出かけるジェソップ氏の伴をして、はじめて北回帰線を越えカルカッタに上陸した。

印度（インド）だ。

頭被（ターバン）、綿布、Maharajah《マハラジア》の国だ。僕は、象に乗り蛇使い（スネークチャーマー）を見、Lingam《リンガム》の、散在する印度教寺院を見歩いた。しかし、そのバトナやカルカッタにはなんの物語もない。それから、汽車で南行、中部印度のプーリという町にきてはじめてこの話が起る。

そこの宿は、ホテル「風の宮（ウィンド・パレス）」という洒落（しゃれ）た名であったが、部屋は、Apadravya《アパドラヴィヤ》という裏町に向いて汚い。

露台が、重なり合っている狭くるしい通りは、また、更紗（さらさ）や麻布の日覆いでしたの土が見えない。しかし、夜は美しい。更紗を洩れる灯、昼間は気付かなかった露台の影絵（シルエット）、パタンやブルマンの喧嘩（エロ）たる取引は、さながら、往時バグダッドの繁栄そのものである。

平太鼓（タム・タム）が聴える……。それを子守唄に、寝ればまた「一千一夜物語（アラビアンナイト）」を夢みる。バクストの装置（デザイン）、カルサヴィナが踊るシェヘラザーデの陽炎（かげろう）。まるでそれは、僕がHaroun《ハルーン》al《アル》Raschid《ラシッド》で、ここへ彷徨（さまよ）い着いたようであった。

ところが、そうして滞在三日目の夕のことである。

窓からみると、砂堤の蔭に首絞め台のようなものが見える。それが、最初の日から気になっていたので、ジェソップ氏を誘い散歩がてら出かけていった。が、側へゆくと、それはMasula《マスラ》という名の、車井戸だったのだ（この Masula《マスラ》というのは、あるいはこの地方の小舟の名であったかもしれぬ。いずれにせよ、いまは時経て記憶に定かでなし）。

水牛が、釣瓶縄（つるべなわ）を引くと、絞め殺されるような音を立てる。陽は落ちんとして、マハナディ三角洲（デルタ）はくらい靄（もや）のしたにあった。

するとそれから、騾（ら）をつないであるアカシヤのしたまで来ると、とたんに、そばの草叢（くさむら）がガサガサっと動いた。

蛇（コブラ）

（眼鏡蛇かな？）

それは、慄っとするのと飛び退くのと、同時だった。しかしジェソップ氏は、からだをかがめ顔を地にすれすれにして、とおく残光が、黄麻畑の果にただようあたりに透した。

間もなく彼は、手の泥を払いながら顫える私をながめ、

「ありゃ、君、人間の手だよ」

と、嗤うのだった。

そこで、Mr. O'Grie が安堵したことは云うまでもない。

しかしジェソップ氏は、顎を撫でながらじっと考え込んでいる。僕は、その腹芸を怪訝に思い、とにかく、騾を引いてきてお乗んなさいとばかりにすると、

「君、ちょっとあの男を呼んで来てくれんかね」

と云うのだ。

「でも……何でです?」

私は、なにがなんでも得体が分らないので、躊躇するとジェソップ氏は手をあげ、

「いや君は分らんだろうが、これには理由がある」

と、声を低め、云い訳顔に語りはじめた。

「このね、マハナディ川の上流には、ダイアモンド鉱地がある。昔とちがって、いまは萎靡凋落のどん底にあるが、それでも、肉紅玉髄、柘榴石などに混ってたまたま出ることがある。それもなんだ、藩王の経営だから採収法が古い。警備も、南阿の諸鉱地とは、てんで比較にならんのだ。鉄条網もない。電気柵もない。南阿じゃ、着物を縫目まで解いて身体検査をするというが、ここじゃそれほどでもあるまい」

「では、発見した鉱夫が逃げられるじゃありませんか」

「そこなんだ。宝石が、たまたま出るとそれを持ち逃げして追手を避け避け、外国船に売り込む……。いや、あれがそうだとは、必ずしも云わんよ。しかし、万事こうしたことは、カン一つだからね」

それが、ジェソップ氏の持つ、最大の悪癖だった。賭けたがること、相場が好き、ボロ株が好き、おまけに、角力が好きで光風が贔屓であった。しかし、それも考えれば理由のないこともない。草叢という、眼鏡蛇の通路に這い寝そべっているのは、なんぼなんでも並々のことではないからだ。

やがて僕は、主命もだしがたく、草叢に近寄っていった。そうして、怪人 Ram《ラム》 Chand《チャンド》君の出現ということになったのである。

そこで断っておくが、ジェソップ氏は印度語が喋れない。僕も、Indian《インディアン》 Press《プレッス》 Reader《リーダー》の初級くらいのところ、けだし僕を引っ張り役にしたのも、理由がその辺にあるらしい。が、僕とはいえ……ペラペラやられたら冷汗ものののところが、運よく、その青年は正統の英語が喋れた。

かれはすぐ飯を食わすというと懶るそうに起きあがり、のそのそと僕のあとを跟いてきたのである。

それから、僕が日本語でやる生擒の報告中、チャンドを見るジェソップ氏の眼に、失望の色が濃くなってきた。

服装は汚い、それも泥だらけで芬々たる臭気だ。が、顔は、印度アールヤン族の正系ともいう、どう見ても、サンブルプールあたりからのダイヤモンド鉱夫ではない。しかし、人は見かけによらぬというもの——おそらくジェソップ氏の腹も、同じだったろうと思われる。

とにかく、チャンドの気品は、絶品というに近かった。たとえて

云えば、キップリングの〝Naulakha《ナウラーカ》〟に出てくるラホールの王子――といっても、僕自身には褒め過ぎとは思えない。

しかし、そのチャンドにはなんの用もないのだ。といって、ブラブラさせては不安がるだろうというので、おもにジェソップ氏の身廻りの用をさせていた。がその間、僕には大命が下っていた。それは、チャンドをそれとなく探ることで、ジェソップ氏は、またまたダイヤならずば黄玉石くらいの夢を見ていたらしい。

しかし僕は、いつかチャンドの別の方面に、興味を持つようになった。それは、ジェソップ氏に対しても決して大人とは云わないこと、印度人が、自らを卑くして駱駝のように膝を折る、あれがチャンドの雰囲気にはないのだ。

やがて、イギリス嫌いの僕は、この青年が好きになった。実際ジェソップ氏のような、ズボラで人の良い英人はいないのだから、僕には、クライヴもヘースチングも村井長庵と大差ないのだ。そんなもんだから、チャンド君に打ち込んだせいもあり、今度は彼の健康が気遣われてきた。

はじめ来たときは、二、三日食わないとこんなかと思ったのが、五日、十日となっても少しも回復しない。

憔悴、脱力、眼に力はなく、気懶るげに動いている。僕もしまいには、心配になってきて、あれこれとなだめすかしては問い訊した結果、ついにある夜口を割らしてしまったのである。

それは、黄玉石でも、ダイヤでもなかった。愛経の印度、※婆の破壊をいまだに疑わぬ印度――その板挟みに、哀れやチャンド君はペシャンコにされ、青春の泉を涸々にしてしまったというのである。

この告白は、たぶん惰気と暑さで、諸君を困らしめるにちがいない。それほど、印度も暑いが、この話もそうである。

二、嫩味絶々

（以下、ラム・チャンドの告白）

Mr. O'Grie あなたは、紳士にも似ず執拗いですね。さっきは、僕の生家もなにも訊かないと、約束したくせに……。

だが、教育を受けた、学校だけはお話しましょう。

それは、印度の北西部カシュミールの首都、スリナガールにあるブリスコー氏の学校というのです。ここには、印度教徒も回教徒もキリスト教徒も、すべてこの地方の上流の子弟があつまるのです。

聴いて御覧なさい。Tyndal-Briscoe's School《ティンダル・ブリスコーズ・スクール》といえば、たいていのものは知っています。

で、そこの、教程を終えてから何をしたかというと、まず助教師、そして最近は、校主の知己のヘミングウェー嬢が、本土から来られたについて案内役となりました。

その、ミス・ロバータ・ヘミングウェーは、財団の有力者である国璽尚書の令嬢です。まだ二十二か三くらいでしょう。匂いはないかわりに、清純な線があります。

ところが、方々見歩いてこの町に来たとき、偶然ガンディの示威運動が起ったのでした。町は、兵士の発砲以来、廃墟のようになりました。雨が降る、汗が蒸し暑さに腐るように匂う――、事の起りはそういう晩だったのです。

そうそう、宿は「神主」館でしたよ。そして僕は、そのときヘミ

ングウェー嬢の部屋にいました。外は、ザクザクガチャガチャという音で巡邏が絶えません。しかし僕は、地図を見ながら、南行のスケデュールを組んでいました。と、隣りから、湯のはねる媚めかしい音がする。いま、ミス・ヘミングウェーが御入浴中なのです。

　するとそこから、

「パドミーニ、パドミーニや」

　とお呼びになる声がします。

　尻あがりの、声を聴いただけでも一人娘の、びりびり蟲のつよいところが触れてくる。

　しかし、下婢のパドミーニはここには居りません。私は、なんと入浴中のレディにお答えしていいものかと、惑っているうちに、二度目のお声です。

「パドミーニ、パドミーニはいるんじゃないの、そこに。駄目よ、黙って、拗ねていたって、ちゃんと分るんだから……」

　と、湯の面にぴしゃりと何かを叩きつけたらしいのです。

「パドミーニ、パドミーニってば……」

　そういって、ミス・ヘミングウェーはしばらくのあいだ、耳を澄ますようにじっと湯の音をさせませんでした。

「じゃ誰よ、そこにいんのは？　さっきから、かさこそ音をさせていて、給仕？」

「いや、僕です。パドミーニは、さっきからここには居りません」

「ああ、なんだ、チャンドさんか」

　しかし私は、爽やかな、処女を粧るさまざまな香りに、こう隣ったことを、たいへん有難く思いました。

　とやがて、

「チャンドさん」

　と羞らったような声で、

「ちょっと、あんたにお願いがあるんだけど、……実はパドミーニがいないんで、お願いするんだけど……、そこにある、三角海綿をここへ持ってきてくれない？」

　とたんに、私は、ぱちぱちっと瞬きました。ゆらゆら、鍵穴を洩れる湯気が、肢体のように妖しく見えます。

「でも……」と、やっと返辞はしたが、子供のような答えです。すると、ヘミングウェー嬢は、

「アラ、厭なの。じゃ、何かそこでしていんじゃない？　抽斗や、下着入れを覗いているんだったら、今のうちに蔵うことよ……」

　やがて私は、パドミーニが出しわすれていた三角スポンジを手に、把手をやんわりとひねっていました。が、実のところは、動作に現われているような、そんな落着きはないのです。

（なにを……ミス・ヘミングウェーのこれは、意味するのだろう。処女が、娘の媚態ともいう羞恥心を捨ててまで、自分に、浴室に入れとは、戯れだけと云えないことだ。）

　と、妙な自負心に、私はからだ中浮いてしまったように……ああ、Mr. O'Grie、嗤いますね。が、それも、あなたはミス・ヘミングウェーを知らないからです。

　つぶらな瞳、弾力のあるふっくらとした頬、顔もからだも、ほどよく締っていて、弾みだしそうです。

　神品ですよ。触れようとしても出来ぬものはことごとく神品です。

　私は……だが、いかなる場合でも、ブリスコーの生徒でした。

「じゃ、ここへ置きますから」

「そう。有難う。でも、ちょっとの間なら、ここにいてもいいわ」
私の、そのときの驚きは何ものに例えようもありません。しかし、ミス・ヘミングウェーは、続けさまに云うのです。
「どう私、頭のほうもそう悪かァないでしょう。湯気で、あんたの眼鏡が曇って、なにも見えないのを知ってるんだから。見えて？……私が、いま、どんなことをしているか」
と、はげしい湯の音がして飛沫がかかると、淡紅色の、暈やっとした塊りが、眼前の靄のなかにあらわれました。
揺れる、くねる。
私は、咽喉がからからになって自分の喘ぎが、ガンガン鳴る耳のなかへ響いてきます。
「では御ゆるり」
私は、やっと咽喉をうるおし、これだけを云いました。すると、ヘミングウェー嬢は、
「マア、あんた、あんたは割と世帯染みてんのね」
そう云って、くすんとお笑いになったようです。が、その頃から、鏡玉が室の温度に馴れ、やっと靄が霽れはじめてきました。と、灌水のひらいた、夕立のような音がする。
それも、湯のほうが捻られて、もうもうと立ち罩めてくる。せっかくの、喘ぐような瞬間がまた旧へ戻ってしまったのです。
「お気の毒さまね」
ミス・ヘミングウェーが、嘲るように云いました。
「なにがです」
「知っているくせに。……もっと黒檀紳士は、明けっ放しの人かと思っていたわ。つまり、四十碼スクラムからスリークォーター・バスになって、それを、私がカットして好蹴をタッチに蹴出す。一挙これじゃ、三十碼挽回ね」
「分りませんね。何です、それは」
「分らないの、マアいいわ。いいから、出てないと水を引っかけるわよ」
私はさんざんに翻弄され、それでも、若葉を嗅ぐような、爽けい匂いをつけて戻ってきました。
それから、部屋へ戻って寝台にころがっているうちに私は、四肢五体を揉みほごされるように狂わしくなってきたのです。
（なんのためだ……なんのために僕を浴室なんかへ呼んだのだ？）
それは、あるいはミス・ヘミングウェーの気紛れかもしれないが、いちがいにそう云い切ってしまうには、あまりに、奔騰的だ、噴油だ。鬱積しているものが悶え出ようとしているのか。
（ふむ、よくあることだ。よく、青葉病といって、急に憂鬱になるか、それとも、見境いなく齧りつくような、亢進症になるか――。とにかくあれは、殻を割りたくても、割り得ない悩みなんだ。あの娘は、心のなかじゃ充分熟れ切っている。そこへ、破ろうとしても、させないような潔癖さがあるのだ。そうだ、たしかに処女性の病的なものがある。）
と、決めてしまうのも、独り合点でしょうか。分りません⁉　ミス・ヘミングウェーと、私とのあいだには人種の壁がある。そしてこれも、一夜のほんの戯れだけでしょうか。
私は、そうして右せんか左せんかと悩み、奇怪な謎を投げかけたヘミングウェー嬢の行為を思いあぐみ惑乱に悶えておりました。
ああ、O'Grie《オーグリー》、あなたは、それからの私をお嗤い

になるでしょう。暇さえあれば、留守を狙ってヘミングウェー嬢の部屋へ忍び込み、部屋に残っている薫香に鼻をうごめかしたものです。O'Grie All is glowing, burning, trembling.

　馬鹿です。しかし天はこの馬鹿に恵み給うたのか、翌日も雨、その次も雨、しかも暴動の気配が絶えず、ときどき銃声がする。風もない、ただ雨が滝のように地を打っている。

　ところで、その日からはじまる八日のあいだが、カリーの女神を祭る精進日となるのです。

　水浴をし、あらゆる慾望を絶ち、子羊を犠牲にする。そしてもって、破壊の女神カリーをお慰め申しあげるのです。けれど、いまここでは祭典どころではない。雨に暴動、加えて湯気のようなおそろしい湿気です。

　しかしそうした時、ごろごろ懶いままに転がっている姿は、だんだん心も獣のようなそれと同じになるのではないでしょうか。

　私も、自分ながら、理性を失わんとしているのが分ります。やがて、暗い空がいっそう暗くなり、雨脚も消え、煮られるような夜となりました。

　ところが、その夜ヘミングウェー嬢に、神経痛の発作が起りました。前年、ポロの競技中落馬が原因で、その後は、暑さ寒さにつれ、右肩が痛むのです。それでパドミーニと交代に、患部の湿布をかえておりました。甲斐甲斐しく、腕まくりしてギュッとタオルを絞る、すべてが、われながら驚くほどマメだったのです。とその時、通りをザッザッっと、靴音でない一群が通ってゆく。

「アッ、あれ、きっと何だわ」

「なるほど」

「あらッ、私まだなんにも云ってないのに……」

　私は、ときどき失敗をやってはぎゅうぎゅうな目に逢わされ、それが久しく外道的な快楽となっているのです。いま私は、右手でタオルを抑えながら、左手は、ミス・ヘミングウェーの莨に灰受けを捧げている。

　ああ、いかに場合とはいえブリスコーの生徒が、落ちたにも百面相とはなったものです。

「ああ、そうか」

　私は、ポンと手を打つかわりに灰皿を上げて、静かに莨灰を落させる。

「分りましたよ、非常時の馬鹿力というのが、あれほど、お痛みだったのが土民がとおると、瞬間ケロリと忘れてしまう……。いや、気が張っとりますと、感じないのですなア」

「そうかしら」

「処世上、その点には、つどつど考えさせられます」

「じゃ、処生哲学ね」

　ミス・ヘミングウェーがクスンと笑いながら、

「あたし、まえにはチャンドさんを、ちがう人かと思ってたわ。口説き上手で、パドミーニのような娘を悦ばせるかわりに、かならずただじゃ済ませない。よく、世間にあるあの類型ね？」

「……」

「ところが」

　と、云いながら、ヘミングウェー嬢は痛そうに顔をしかめはじめたのです。けれど、まだそれは忍べぬというほどのものではないらしい。

「ただ、あんたは実にまめだと思う」
「まめですか。僕は」
「そう、ほかにも良いところが、きっとあるんだろうと思うわ。だけど、なにしろまめすぎるんでほかが分らなくなるの」
彼女一流の毒舌が、このときはまったく苦痛のなかから発せられました。
「パドミーニ、パドミーニを呼んで」
腰の痛みだけは、私にもさすが触らせない……しかしパドミーニは、いつになってもこの室へ戻ってこない。
（パドミーニがいない。）
それをさっきから、私はミス・ヘミングウェーに、思い出させまいとしていたのだ。彼女はいまコック部屋にいる。回教徒だから、カリーさまのこの日にも、なんのお咎めもあるまい。
そしてその間、私が万事取り仕切ってまめまめしく働き、ほとんど、触らんばかりの身近にいる愉悦を、パドミーニがきて妨げられまいとしていたのだ。私は、心のなかで、チェッと舌打ちをしました。ところへ、
「呼んで……、ねえ、早く」
とヘミングウェー嬢が、胸をそらし、苦しそうに呻きはじめました。
「はやく、チャンドさん、引っ張って来てよう」
「ですが」
さすがに私も狼狽え気味になって、
「考えてみますと……あれから、もう四、五時間も見えないのですから」
「そう、そう云えば……」
と、痛みを忘れたように、不安気に眼を据え、
「あれ、何時だったろう。パドミーニは、食堂から出て、たしか……」
と、だんだん、ミス・ヘミングウェーの顔は羞らったようになり、観念の色がなに事かを決めようとしました。
とその時、通りのどこかでワアッと喚声があがると、数発の、銃声とともにおそろしい音が部屋に起りました。窓硝子が木葉微塵となり、どこか、蒲団のしたからキナ臭い匂いが立ちのぼってきます。
その瞬間、せっかくの機会がぶち壊れてしまったばかりか、ミス・ヘミングウェーは、恐怖に駆られワアッと泣きながら、地下室の酒倉へ逃げ込んでしまったのです。
つまりこれは、カリーの女神の嘉し給わなかったことでしょうか。それからも、ミス・ヘミングウェーは相変らずの態度で、おお機会と、叫ばせられたのも何度かありました。が、私には、印度教徒の戒律を思わぬわけには、ゆきません。最初の夜の、神意的破壊的の銃声が、もし啓示としたならばこの次はどうでしょう。
ああ、O'Grie《オーグリー》、煩悩はたけり、信仰は脅かす。精進潔斎のその日に、女人を得ようとしたのは、返す返すも悲しいめぐり合わせでした。
私はそれから、来る日来る日うつらと送りましたが、しかし、希望はまだ九日目にあります。精進明けの、その日には何事も自由です。そして雨も、その前々夜にはからっと上がり、町にはすでに火薬の匂いもありません。朝の風が、黍畑をひたす出水のうえを渡り、湿原で鳴く、印度犀の声を手近のように送ってきます。ヘミングウ

エー嬢は、この朝高台公園（ハイ・パーク）の遊歩場へゆき、八時頃には、木蔭を縫う馬蹄の響が聴えてきました。

そこで私は、とって降した彼女の手をかるく握りますと、どうでしょう、そのうえにピシリと鞭が降りました。

ああ、私はとたんに自己を失い……思わぬ変り方、あまりな恥辱にそのまま面（おもて）を伏せ、ホテルには入らず一目散に駈け出しました。

それからの放浪です。

私はつくづく、祭、祭に縛られる印度（インド）民族が厭になり、と云って、遠い祖先の収穫をいのる声がふり※（もぎ）ろうとしてもどうしても離れないのです。おお、O'Grie《オーグリー》、なに事にも印度民族はこのディレンマに困（くる）しめられます。信教と、民族発展とに背反するものを持つ……。

おお、O'Grie《オーグリー》、お国へ行きましょう。

しかし私は、聴いているうちにも、ほかの事を考えていた。それは、ミス・ヘミングウェーのことで、ああさせた、Aphrodisiac なものは何事であろうか。近傍の……日天（スールヤ）の堂でも見たのか。そこには、奇矯のかぎりを尽す群神の嬌態がある。それとも、麝香（じゃこう）、沈香（ちんこう）、素馨（そけい）の香りに――熱帯の香気に眩暈を感じたのではないか。

いずれにせよ、八日間精進のことは知っていたにちがいない。そして、雨後の冷気が、ムラ気と火遊びを鎮めるに充分だった――と。

やがて、夜が明けかかり闇が白みはじめたころ、私は、菩提樹の梢をとおして、暁にふるえるユニオン・ジャックの翩翻（へんぽん）たるを見たのである。印度（インド）の朝、しかし真実の黎明（れいめい）には遠い。私はチャンド君の寝顔と見くらべ、そう呟いたのであった。

青空文庫情報

底本：「潜航艇「鷹の城」」現代教養文庫、社会思想社
1977（昭和52）年12月15日初版第1刷発行
底本の親本：「地中海」ラヂオ科学社
1938（昭和13）年9月
初出：「新青年」博文館
1938（昭和13）年8月号
入力：ロクス・ソルス
校正：Juki
2008年10月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一週一夜物語

小栗虫太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/